

文学のころ、詩のころ — 文芸を愛する一ゲルマニストの心情の吐露 —

八亀 徳也

私の学生時代—それは今から50年も前のことですが—私は「文学概論」の授業を合計3期受講しました。1期の長さは半年間、担当教授の突然の休講1、2回を差し引いてそれぞれ12、3回の講義があったと思います。なぜ、合計3期もの授業を履修することになったかと申しますと、それは講義内容が退屈で、すぐに授業を放棄したくなったからであります。

1度目は大学2年生のとき。担当者は中国文学の大家で、英語の教科書を学生に買わせましたが、ほとんどこれを使用せず、実際の授業内容は自由な屈託のない放談で、私は3、4回出席して止めました。翌年2度目のチャレンジをした際の担当者は国文学科の教授で、専門領域は江戸文学でした。温和な方で、いつも和服を召しておられたことが強く印象に残っています。この先生の授業は2、3回で断念しました。

それから2、3年後、留学から帰った私は、必修科目「文学概論」の単位はどうしても取らざるを得ませんでしたので、最後のチャンスとして12、3回の授業には全て出席しました。このときの担当教官は再び中国文学科の、しかし前述とは別の教授でした。講義のテーマは「風流」で、本来中国起源のこの用語の意味の変遷を詳しく解説しておられました。成績評価はレポート提出によるものでして、私は、すでに論文発表もしておられた教授の話をお忠実にノートに記述したとおりに書いたのですが、「良」しかもらえませんでした。教授は独創的なレポートを期待しておられたのかも知れません。

私は今でこそよく分かりますが、当時の文学部文学系学科の主任教授らは、この科目の担当ローテーションに止むを得ず従いながら、毎年苦勞しておられたのでしょう。大体、「文学概論」や「文学とは何か」などについて講義することほど難しく厄介なものはありません。文学に関

する本質論の筋道を失うことなく講じながら、1時間の間に少なくとも3、4回は学生たちをハッとさせたり、笑わせたり、あるいは唸らせたりするような話題を挟まなくては、彼らは居眠りするか逃げるかしてしまいます。

さて、私の2度目のチャレンジの際の国文学者は、第1回目の授業の終わりに、「なぜ文学を学ぶか」という課題で作文を書かされました。文学晩生だった私は真面目に考え、その理由を、おおよそ「人間や人間社会を理解する一手段にするため」という風に書きました。このことを国文科の教授は、私が属していた独文科の主任教授に話されたらしく、後日、独文の主任は、「君はもっと柔軟な気持ちで文学にとり組まなアカン。『好色一代男』ぐらい読んだらどうや」などと仰いました。国文科教授は西鶴の専門家で、すでに昭和26年(1951年)に『定本西鶴全集、第一巻』を中央公論社から出しておられましたから、独文科の先生が、私に忠告なさろうとしたときに、チラッと西鶴のことが脳裏を掠めたのでしょう。

ただ、もう二十歳に達していた私とても、常に堅物であった訳では決してありません。また好色文学に関心がなかった訳でもなく、当時売れっ子のポルノ作家だった川上宗薫や宇野鴻一郎ぐらいの名前は知っていましたし、それよりも何よりも、文学作品を読む場合の原点、すなわち、現実世界から離れ、あるいは逃避し、想像力、空想力を働かせてフィクションの世界に遊ぶ楽しみや醍醐味を、たとえ理論化はできていなくても、無意識に体験していたことも事実です。

*

私の幼少期における読書体験はと申しますと、田舎育ちで、暇さえあれば学校のグラウンドや野山を走り回っていたものですから、極めて貧弱な状態でした。その頃読んだ文学作品らしきものは、岡山市の「カバヤ食品」が「カバヤキャラメル」のクーポン券の一定の点数と引き換えに、子供たちに世界文学の名作を提供していた「カバヤ文庫」の数冊ぐらいしかありませんが、小学5、6年生の頃、我が家で購読していた『少年クラブ』の中で読んだ新田次郎の読み物との出会いが、最初の文学体験だったと言えると思います。新田氏は43年前の昭和46年(1971年)に単行本『八甲田山死の彷徨』を新潮社から出しておられますが、昭和27

年（1952年）に初めて『八甲田山』と題する小品を発表され、その後氏の短編集に収録されてからこの作品が認められたそうですから、私が『少年クラブ』でお目にかかった読み物は、おそらく子供向きに脚色されたものだったのでしょう。

新潮社刊『八甲田山死の彷徨』をお読みになられた方、あるいはその後この作品をもとに製作された映画『八甲田山』をご覧になった方はご存知のように、あの日露戦争（1904～05年、110年前）に先立つこと2年、明治35年（1902年）1月に、青森歩兵第五連隊第二大隊の将兵が雪中行軍の途中、八甲田山で猛吹雪に遭遇し、210名中199名が凍死するという大事故が起きました。歴史上の記録に残っている限りでは、たぶん史上最悪の冬季山岳遭難事故でしょう。なお、この極東の大事件は、わずか20日後にイタリアの新聞でも、カラーの挿絵入りで報道されています。

私が『少年クラブ』で読んだ短編作品の文章はもう何も覚えていませんが、唯一つ、飢えと寒さと疲労のために意識の朦朧となった兵士の何人かが、近くに並ぶ立ち木の列を見つけて、援軍が来たかと錯覚するところの描写だけは私に強烈な印象を残しましたし、明治末期のこの大事故自体、それ以来長らく私の心を占めてきました。また私は、これまで2回現地を訪れ、八甲田連峰の麓の荒涼とした平原を彷徨し、青森市幸畑にある陸軍墓地と資料館を見学し、とくに1回目には、あの遭難のとき、活路を求めて必死でもがく兵士たちが空しく転がり落ちて行ったであろう、ダケカンバが生い茂る斜面の、九十九折りになった急な下り坂をおり、谷底の駒込川まで達しました。

ところで、幸畑の「雪中行軍遭難資料館」に依りますと、新田次郎氏の『八甲田山』に対して、青森の自衛隊第八師団が、事実と反するところがあるとして抗議したそうです。例えば、小説では、山田少佐（本名：山口少佐）が、実質的な計画と指揮を命じられていた神田大尉（本名：神成大尉）を無視して勝手に口を挟み、行軍隊を混乱に陥れたとの責任を取って、救出後搬送された病院でピストル自殺を遂げた、ということになっていますが、少佐は行軍中も病院でも拳銃を所持していなかった、とのこと。また、青森県十和田湖町出身の新聞記者で、資料を駆使した歴史書『吹雪の惨劇』第1部と第2部（初版はそれぞれ、昭和45年（1970年）と昭和49年（1974年））を出しておられた小笠原孤酒という人

は、新田氏に多くの資料を貸与されましたが、小説の方がベストセラーになってから、もともと第5部まで出版することになっていた計画を断念し、筆を折ってしまわれた、とされています。蓋し、フィクションの面白さと同時に、事実との乖離の危うさ、怖さ、とでも言うべきでしょうか。

*

さて、私は、学会案内状の概要で申し述べておきましたように、これまで長年ドイツ語教師を続けて来ながら、決して、徹底的に研究対象を追究するような厳しい語学者でもなかったですし、情熱的に研究に取り組む、あるいは、他の追隨を許さないくらいの、異常とも言えるほどの繊細な感性で作品を読める文学研究者でもありませんでした。

確かに、英語や近現代のドイツ語を除き、曲がりなりにも私は、中高ドイツ語、古高ドイツ語、中世英語、古代英語、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、ロシア語、ポーランド語の、九つの外国語を手掛けましたが、身についたものは殆どありません。

文学の世界においても、私は、溺れるくらいに作品を多読、乱読しては仲間と熱い文学論を戦わせるほどの文学青年ではなく、センス豊かで、ドイツ語を見事な日本語に翻訳できる詩的人間でもありませんでした。学生時代の一時期、三島由紀夫に興味を持って彼の小説を続けざまに数冊読み、ある時、2、3年後輩の独文科学学生と雑談していましたが、その学生に、三島の作品は全部読んだと聞かされて、私は、それ以来、三島由紀夫を一切読まなくなりました。

これも学生時代のことですが、ドイツ語の授業中に担当の先生が、「君たちの先輩に在学中からドイツ語の詩を書いてはヘルマン・ヘッセにそれを送る人がいた」という話をされました。そして、ヘッセからは返事が来ていたそうです。私は、凄い人がいたものだと思います。ただ残念なことに、若い頃から極端に自己に厳しく、また常に、自分は周囲の人間に理解されない、と嘆いておられたその人は、大学院を修了した後、ある大阪府下の大学に就職してから1年も経たない内に、真冬、無謀にも出身地の信州の雪山に入り、そのまま帰らぬ人となりました。後年、その人の同僚だった方から直接聞きましたが、「あれは Selbstmord だった」と仰っておられました。私もこれまで人並みに何度も悩みを抱えてきま

したが、この人のように問題を最後の極限にまで突き詰めて考える情念を持たず、その都度この娑婆世界で、在り来りたる常識的解決方法で局面を打開して来たに過ぎません。トーマス・マンの小説『トーニオ・クレーガー』で、主人公のトーニオは、ミュンヘンで知り合ったロシア人の画家エリザベータに、市民にも芸術家にもなり切れない「道に迷った俗人」と評されますが、私はこのような俗人にもなれなかったように思います。

*

今回、この講演を準備するに当たり、私は、これまでドイツ語教師として過ごして来た40年余を振り返り、自分は、一つの目標を追い続ける研究一筋の教師生活を送って、その中で一定の成果を上げた、などとはとても言えないことを再認識せざるを得ませんでした。

ここで暫く私の研究歴について報告させて頂きたいと思いますので、お付き合い下さるようお願いいたします。

私は、修士論文でシラーの戯曲『ヴァレンシュタイン』三部作を扱いました。シラーとの出会いは全く偶然に因るものでして、大学院の授業でテキストになったグリルパルツァーの悲劇『オットカール王の幸運と最後』についてレポートを書く際に参考のために、確かレクラム文庫のテキストのあとがきを読んだところ、この悲劇と比較すべき劇作品として『ヴァレンシュタイン』が挙げられており、私はこのドラマを読んで少なからぬ刺激を受けました。シラーとグリルパルツァーは、時代こそ違え、それぞれドイツとオーストリアを代表する戯曲の大家ですからお互いに遜色はありません。しかし、『ヴァレンシュタイン』三部作は、シラーの戯曲作品の中で最大のものです。私は、未熟な青二才がまるで螻蛄の斧よろしく、よくぞこんな大作に挑んだものだと思います。修論では、謀反を起こした腹心の部下たちに暗殺されるヴァレンシュタインの死の不条理さと運命の皮肉とに力点を置いたつもりでしたが、当時の私はまだ“ネメズイス”という言葉すら知りませんでした。

修士課程修了と同時に、有難いことに本学に採用して頂きまして、それから約15年間シラー研究を続けることとなります。当時この阪神地区にはシラー研究者が多く（例えば、大阪大学の石川實先生と中村元保先生、神戸大学の神代尚志先生、関西学院大学の須賀洋一先生など）、私

は多くの影響を受けることができました。やがてこれらの先生を中心に「シラー研究会」が立ち上げられ、研究会例会は月に1回、最初は千里中央の「豊中市千里文化センター」の会議室で、後には大阪市の「淀川区民センター」で開かれました。

シラー研究の15年間、私は彼のドラマを中心に勉強をし、『群盗』、『ドン・カルロス』、『ヴァレンシュタイン』などに関する論文を書きましたが、30代の中頃、短編小説『名誉を失った犯罪者』に取り組み、マールバハのシラー研究所から一次資料のコピーを取り寄せ、背伸びしてドイツ語で論文を発表しました。その抜刷りを名古屋の南山大学におられた内藤克彦先生に送ったところ、「これだけの一級資料を使いながら十分消化しておられない、勿体ないことです」と批評されました。力不足、勉強不足を思い知らされました。

ところで、シラーのこの散文作品にはすでにそれ以前に一度お目にかかっていました。昭和48年（1973年）1月、私が文学部独文科の助手試験を受けたとき、独文和訳問題の一つとしてその一節が出題されていたのです。出題者はもちろん、シラーを研究しておられた丸山先生。その出題部分には、今思い出す限り意味不明の単語はありませんでしたが、一つ、übermännen（「圧倒する」、「打ち負かす」）という他動詞だけは知りませんでした。が、前後関係から判断して、意味が通るように訳せました。あの頃、私の頭脳はまだ柔軟で活発に働いていました。後日、丸山先生は何かの折に、「君はあの作品を知っとったん違うか」と聞かれました。私は否定しましたが、先生はなおも怪訝な顔をしておられました。

*

昭和54年（1979年）に阪神ドイツ文学会で、大阪市立大学の南大路先生を中心に、2回の、レッシング生誕250年記念シンポジウム「ドイツ市民劇の成立と展開」が開催され、私は、11月に行われました2回目のシンポジウムで、「シュトゥルム・ウント・ドラングの市民劇——レンツとヴァーグナーの作品を中心に——」というテーマで報告をいたしました。私がヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ（1751-1792）に本格的に取り組むようになりましたのは、この阪神地区で、「ドイツ市民劇研究会」が正式に発足した昭和55年（1980年）からであります。

なお、「市民劇研究会」の活動中は、メンバーの多くが重複する「シラー研究会」は休業状態となりました。

さて、この「ドイツ市民劇研究会」も、やはり大阪市大の南大路先生の肝煎りで生まれたものでして、当初から、「凡そ“市民劇”と銘打たれた作品は全て読む」、「この共同研究が終わったら本にしてまとめる」ということを目標にしていました。例会は月に1度、午前中は、前の回に作品の紹介と解釈・分析の担当を任された者の報告、午後は自由に話題提供を申し出ているメンバーの報告、という形を取り、場所は、先述しました淀川区民センターでした。

昭和55年（1980年）11月に始まった研究会は58年（1983年）7月に修了、成果はその3年後に『ドイツ市民劇研究』として上梓され、さらに15年後の2001年には、タイトルを少し変えて、その第二版『18世紀ドイツ市民劇研究』が刊行されました。余談ですが、昨年秋、名古屋大学で「日本18世紀学会」の研究発表会があった折、若いロシア文学研究者が、ドイツ市民劇の影響を受けて、ロシアで最初の市民劇を書いたという作家を紹介し、また我われの研究書を参考文献として利用した、との話を聞いて感激し、版元から新本を（2割の執筆者割引で）プレゼントしてしまいました。

ところで、私がレンツに関する最初の論文を書いたのは昭和56年（1981年）でした。今からもう33年も前のことです。よくぞここまで馬齢を重ねてきたという思いを強くします。この論文では、シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）時代唯一の演劇論と言われる『演劇覚え書』（Anmerkungen übers Theater）について論じました。すでに100年以上も前に、テーオドーア・フリードリヒという学者がこの作品に関する極めて精緻な研究を残しています。それに依りますと、レンツはストラスブルグ時代、自ら主宰していた「哲学と文芸の会」で行なった4回の講演をつなぎ合わせたとのことで、レンツ自身が、「この著作をラプソディー風に（rapsodienweise）読者に伝える」と言っている通り、突然の飛躍、思考や表現の中断、論理矛盾、思いつき等々が多くあり、中々厄介な論文です。レンツの目的の一つは、17世紀フランス古典劇や、それが手本として仰いでいたアリストテレスの詩学の硬直性、またその古典劇の虚飾性を徹底的に叩くことでした。私はアリストテレスのギリシャ語原文

と、レンツが例示として引用しているはずの数箇所のドイツ語訳とを比較対照しようといふあれこれ苦労しましたが、結局うまく行かず、この部分の論究は投げ出してしまいました。

それ以降のレンツ研究では、シラー研究の場合と違って、単にドラマだけを読むのではなく、色々な角度から、この特異な疾風怒濤詩人の探求に努めています。とくにここ10年くらいは、ハンス-ゲルト・ヴィンターのレンツ小伝「Jakob Michael Reinhold Lenz」(1987¹、2000²)に触発されて、過去200年の間に後世の作家や詩人たちにどのように受容されているか、すなわち、彼らの作品の中で主人公としてどのように再生され描写されているかを調べています。

この間に私は、レンツの歩いた道というものに関心を持つようになりました。もっともこれについて論文を書くつもりはありませんし、そんなことをしても不毛なだけでありましょう。よく知られていますように、レンツは1771年、学生時代の最後に突如ケーニッヒスベルクを去ってから、“永遠の放浪者”(ewiger Wanderer = 私の命名)にふさわしく、1792年5月23日から24日にかけての深夜、モスクワの路上で野垂れ死にするまで、実に多くの土地をさ迷いました。

私はこれまで、彼の生まれ故郷である、現在のラトヴィアの ツェスヴァイネ Cesvaine (独名: Seßwegen、すなわち sechs Wege の会するところ)、少年時代を送ったエストニアの Tartu (独名: Dorpat)、そして創作上、最も実り多い5年間を過ごしたフランス・アルザスのストラスブールまで足を伸ばしました。が、レンツが1776年秋にヴァイマル公国を追放されてバーデン地方に滞在する間に何度か訪れたスイスの各地、1779年夏、家族が住むラトヴィアのリーガに末弟に連れられて戻ってから約1年の内に転々とした、サンクト・ペテルブルクにまで至るバルト世界のあちこち、および人生最後の10年余りを生きたモスクワ、これらの土地土地にまで達するのは容易ではありません。

そうこうする内に、私はもう一人の人物に深くかかわる羽目になりました。

その人物は日本では殆ど知られていませんが、アルザスの山村、ヴァルダースバハの牧師館で59年間も聖職を司り、ほんの一時期レンツの世話をしたことのある牧師、ヨーハン・フリードリヒ・オーバリーン (1740

-1826) です。オーバリーンは、我が国では戦前から“オベリン”の名前で紹介され、終戦直後、彼の精神に心服していた、滋賀県高島市出身の清水安三が東京都町田市に“桜美林学園”を創立します。

とくに私がオーバリーンを評価する必要があると思いますのは、彼が本来の牧師職の仕事以外に、幼児教育と農村改革・農業指導の分野でも多大の貢献をしたからです。

ここで、私の論文から二つの部分を引用させていただきます。

彼はまた、学校教育のために子供用のゲームや実験道具を考案し、地図や白地図を手製の印刷機で印刷し、さらには授業に手品を取り入れ、これを同僚にも勧めた。また野外学習にも重点を置き、「教室での授業は、とくに小さい子供たちの場合、植物と昆虫、岩と岩石と土壌の採集のための遠出によって補われた」とのことである。このことから、彼が、子供が幼い頃より自分の住む土地を自然に学んで行くことに十分配慮していたと考えられる。オーバリーンはまた、出席の良好な子供には報奨金を与えるという、一種の奨学金のような方法も始めている。¹

農業の分野における彼の改革の努力と工夫、あるいは指導は非常に多岐に亘っている。彼自身、牧師館の隣の農地で野菜作りをしたり、雨水を利用した液体肥料、堆肥、腐植土などを作る試みをしたが、村人たちには、下肥のためにトイレを作ることを薦めている。また穀類や他の作物、とくにジャガイモの品種改良にも努め、リンゴ、ナシ、サクランボなどの果樹栽培にも手を染め、さらに植物学への関心から、ブナの実から油、野いちごとビヤクシンからワイン、ニワトコの実からブランデーを作る方法も指導した。他方、牛をより効果的に飼育するために牧草の研究をし、従来のイガマメではなく、ポーランドから輸入した種で育てたウマゴヤシを与えることを

1 八亀「農村改革の牧師、J. F. オーバリーンとアルザス」、和田葉子編著『国境なきヨーロッパ—文学と思想における異文化接触の形—』、関西大学東西学術研究所、2010年、58ページ。

村民に推奨している。酪農の分野では、さらにこれから進んで、余剰のミルクからバターを生産をするよう促し、牛の掛け合わせも工夫したばかりでなく、住民の犬の飼い過ぎに警告を出すなど獣医の仕事にまで踏み込んだ。²

私がこれほどまでオーバリーンに興味を持ちますのは、自身、物心がついた時分から「農作業に慣れ親しんだ」、と表現するのは綺麗ごとでして、本当は「百姓仕事をイヤイヤさせられた」経験と関係があるのかも知れません。

ここまでの話で、レンツ研究についての本来の道筋から大きく逸れてしまいました。レンツはゲーテやトーマス・マンのような大詩人、大作家ではありませんし、立派な人間でもありません。多くの人々に迷惑をかけ、多くの人々の世話になったことはよく知られている事実です。それでもなお彼の作品に読まれる価値があるのは、そのテーマの現代性でありましょう。その代表例が『軍人たち』（1776）であります。この作品こそ、今まさに我が国が国際的に、なかならず近隣の国々から袋叩きに遭っている「慰安婦」の問題にヒントを与えてくれます。

何はともあれ、特にここ数年は、30年以上も前に「ドイツ市民劇研究会」で、先輩研究者からレンツ研究のきっかけを与えてもらったことを回想しては有難く思っています。

*

さて、いよいよ文学の核心に触れるべき段階にまいりました。

私は、今回の講演を準備するに当たり、これまでの数十年間に買い貯めた3、40冊に及ぶ、文学に関する概論書、概説書の中から数冊を選んでみました。そもそも、なぜこんなにたくさん購入したかと申しますと、「文学とは何か」という問いに自分で答えを出す自信がなかったからです。そして、これまで買い漁った数十冊は殆ど読んでいませんでしたし、今回選んだ数冊にも目を通しませんでした。もちろん、文学理論の書物を紐解いたこともあるにはありました。受容論、受容美学、構造主義に関する書物です。しかし何れも私を満足させてくれるものではありません

2 同掲書、60ページ。

した。

率直に告白いたしますと、これまで、或いは教壇に立ち、或いは教卓の前にすわって学生諸君に文学に関して詳しく講ずることができたのは、私が熟知する作家や作品の属する時代とその前後の時代の精神と傾向だけだったのではないかと思います。

「羊頭狗肉」の謗りを受けるでしょうが、学会案内状のレジュメに予告しました「戦後の文学状況云々」の悲憤慷慨も、この場のように、文学研究の専門家が何人もいらっしやる所で軽率に続けるのは憚られますので、その作業は別の機会に譲らせていただきたいと存じます。

ここまで講演の原稿を書き進めてきて、文学作品の解釈の仕方、文学研究の方法は畢竟個人的なことがらであるとの認識を強くしました。自ら文学研究の客観的部分の考察を放棄するようですが、私が具体例として取り上げました三つの作品を鑑賞していただいて、文学そして詩を読む私のこころを押し測って下されば、と思います。

*

最初に、ヴォルフガング・ボルヒェルト（1921-1947）の詩「ランタンの夢」の拙訳を朗読させていただきます。

もし僕が死んだら
せめてこんなランタンで
いたい。
それはきつと君の戸口の前において
おぼろ夜を
くまなく照らすだろう。

それとも
大きな蒸気船が眠り
娘たちが笑う港の
狭く汚い運河のほとりで
目を覚まして
淋しく歩く人にウインクするだろう。

狭い路地に
ぼくはぶら下がっていたい、
赤いブリキのランタンになって
居酒屋の前で—
そして物思いに耽り
客たちの歌に合わせて
夜風に揺れていたたい。

それともひとりの子供が
一人ぼっちでいることに驚いて、
そして風が天窓でひどく唸り—
外では夢のお化けが出るので、
どんぐり眼で灯を点す
そんなランタンでいたい。

そうなんだ、
もしぼくが死んだら
世界のすべてが眠る夜
まったく一人で
もちろん「君ぼく」で
お月さんと語らう
そんなランタンでいたい。³

ボルヒェルトは、第二次世界大戦直後の1947年に26歳の若さで亡くなった作家ですが、代表作で唯一のドラマ『戸口の外で』(Draußen vor der Tür)や「夜になればネズミは眠る」、「台所時計」、「パン」などの短編や、この詩「ランタンの夢」などにおいて明らかのように、北ドイツの町ハンブルクが彼の原点です。

暗い夜のうす汚ない港町、蒸気船、運河、夜風。聞こえるのは、夜の街の娘たちの笑い声と居酒屋で騒ぐ男たちの歌声。そして時折、大型船

3 Wolfgang Borchert: *Das Gesamtwerk*. Hamburg: Rohwolt Verlag. 1959. S.7f.

の霧笛も聞こえて来るのでしょうか。作者の原風景です。彼は、死んだらランタンになって、ひっそりと路地裏にぶら下がっていて、そのような人々を見守っていたい、と言うのです。しかし孤独ではありません。お互いに„duzen“できるお月さんがいるからです。—なんともわびしく切ない、しかし、どこか温かい、ちょうど、周りを少しだけ控えめに明るくするランタンの灯りのような詩です。

もともと、ボルヒェルトの多くの作品では、名もなく目立たない人物が登場します。もちろん意思は持っています。声も上げます。しかし絶叫はしません。声高に叫ぶのは『戸口の外で』の帰還兵ベックマン (Beckmann) くらいのもです。

私は、大学2年生の時の授業でボルヒェルトを知りました。あれからすでに50年が経ちました。今でも、彼の小品集を選んで下さった、あの時の若林光夫先生に感謝しています。私もドイツ語教師になってから、何度も学生たちにボルヒェルトの作品を読ませました。これも一つの“学恩”と言えますでしょうか。

余談ですが、若林先生は灘の清酒メーカー「忠勇」の息子さんでした。「私は酒屋の息子なのに酒が飲めないんですよ」と苦笑いしながら仰っていたのを今でも覚えています。

*

次に、ライナー・マリーア・リルケ (1875-1926) の詩「秋の日」をご覧下さい。

ただ予めお断り申し上げますが、ご存知の通り、リルケ研究者でない私は彼の作品に通暁しておりませんので、ただ単に「ドイツ詩が読める者」としてのみ、言わば Dilettant として、この詩を、あとに引用します『マルテの手記』抜粋と併せて、皆様とともに味わいたいと思います。実はこの詩は、「私もリルケの抒情詩が読めるのではないか」という一縷の望みを抱かせてくれた作品です。

主よ、時が来ました。夏はとても偉大でした。

あなたの影を日時計の上に投げかけ、

野原では風を吹かせてください。

最後の果実に成熟をお命じください。
それらにさらに二日間の、もっと暖かい日々を与え、
それらに成熟を急がせ、
濃いぶどう酒に最後の甘さを注いでください。

いま家を持たない者は、もはや一軒も建てない。
いま独りぼっちの者は、長い間独りぼっちでいて、
夜も寝ず、書を読み、長い手紙を書くだろう。
そして、落ち葉が吹かれるとき、
並木路を行ったり来たり、落ち着きなくさ迷うだろう。⁴

ここで先ず、ドイツ人俳優 Otto Sander の朗読をお聴き下さい⁵。

—極めて平板な読み方です。私の拙い日本語訳にそぐわないことも明白です。因みに、富士川英郎氏も星野慎一氏も、この朗読に合致するような翻訳をしておられます。

私は、第一連および第二連と第三連との間に一つの大きな切れ目があり、前者は神への敬虔な願い、後者は詩人の思い、しかも非常に深い思いがあると解釈しています。第三連で謳われていることは、いまさら神に訴えなくても、全能者なら疾っくにご存知であろうとも理由づけられます。

今度は朗読家 Reiner Unglaub の朗読をご鑑賞下さい⁶。

—抑揚のつけ方と言ひ、間の取り方と言ひ、まったく絶妙な読み方です。

再び余談になって恐縮ですけれども、私には、初めてこの詩を読んだときから、第一連 1 行目後半の“Der Sommer war sehr groß.” (夏はと

4 Rainer Maria Rilke: *Das Buch der Bilder. Insel taschenbuch 2486*. Erste Auflage. Inselverlag 2000. S.38.

5 *Die Lieblingsgedichte der Deutschen. 100 Gedichte*. Patmos Verlagshaus. Das Hörbuch. CD1.

6 Rainer Maria Rilke, *Wenn die Uhren so nah ... 40 Gedichte gesprochen von Reiner Unglaub*. Verlag und Studio für Hörfunkproduktionen. WortCassette.

でも偉大でした)の表現が一番印象的だったのですが、ある会合でこの詩をしました折、一人のドイツ人―と申しますのは、大阪ドイツ文化センターの館長をしていたミヒャエル・シュレーン氏だったのですが―彼はあとで、この一句に感銘を受けたという気持ちを述べていました。

私にとって忘れ難い三つ目の作品は、同じリルケの『マルテの手記』ですが、最も好きな一節をここで引用させていただきます。

ああしかし、詩は若くして書いても、わずかししか出来ていないのだ。ひとは詩作を先延ばしにし、全生涯のあいだ、出来れば長い生涯のあいだ、意味と甘美さを集めるべきなのだろう。そしたら、最後の最後になって、ひょっとしたらそのときに、出来のよい十行の詩が書けるかもしれない。なぜなら、詩は人々が言うのと違って感情ではないからだ(感情なら十分早くから持っている)―詩は体験なのだ。一行の詩のために人は多くの町々を、人間と事物を見なければならぬ、動物たちを知っていなければならぬ、鳥たちが飛ぶさまを感じなければならぬ。小さな花々が咲くそのしぐさを知っていなければならぬ。ひとは見知らぬ地方の道を、思いがけない出会いを、長いあいだ予期していた別れを回想できなくてはならない。{中略}しかも、ひとは思い出を持っているだけでもまだ十分ではない。思い出がたくさん出来たら、それらを忘れることが出来なければならず、そして、それらが再び戻ってくるのを待つ、大きな忍耐を持たねばならない。なぜなら、思い出そのものはまだ詩ではないからだ。それらが我々の中で血となり、眼差しとしぐさとなり、名もなきものとなり、我々自身と区別できなくなってようやく、そのときようやく、ごく稀な刻(とき)に、一行の詩句の最初の言葉が思い出の真ん中で生まれ、思い出の中から出てくる、ということが起こりうるのだ。⁷

リルケの、詩の言葉の一つ一つまでをも大切にす厳しい態度は言う

7 Rainer Maria Rilke: *Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*. Suhrkamp Verlag. 1973. S.21f.

までもなく、「詩は体験である」と断言している点も注目すべきでしょう。私としてはこれ以上コメントする必要はありませんまい。

*

最後に、最近経験したことを報告しまして、わたしの話の締め括りとしていたしたいと思います。

この夏ドイツに1ヵ月滞在した際、昔初めて留学した大学町マールブルクへ行きました。マールブルクの旧市街は坂の街でして、下から少し登り坂を進んだところにマルクト広場があり、広場からさらに城の方に坂道を上りかけたすぐ右に„Zur Sonne“ という、創業470年の老舗の宿屋（Wirtshaus）がごぞいます。泊まった日の夜8時頃、1階のレストランでビールを飲んでいましたと、いきなり、黒い帽子にチョッキまで着けた黒装束の、20代後半と思しき青年が、„Grüß Gott!“ と言いながら入って来て、何やら物々しい口上を始めました。隣のテーブルのドイツ人客に聞きますと、ケムニッツ出身の指物師（Tischler）の職人（Geselle）だということです。宿代などを集めるのでしょうか、青年は各テーブルを回っては小額の札をもらって、そのまま2階のレストランにも上がって行きました。再び降りて来たとき、彼が先程避けた私のテーブルへ招いて、ビールをおごりました。青年との約5分ほどの会話の中で、彼が日本の伝統的な躰の工法を知っていたのには驚きましたが、「自分は寄った先々で親方から技を„klauen“ する（パクリ）んです」と言ったときには一層びっくりしました。「何だ、これなら日本の『弟子が親方や師匠から技を盗む』というのと同じではないか」と。青年が席を立つとき、私も他の客に倣って多少の金子を渡したことは言うまでもありません。

翌朝、レストランでひとりで食事をしておりますと、スーツにネクタイを締めた40代半ばか後半の男性が、17、8歳の小柄な女の子を連れてやってきました。その人は暫くレジ係の女性とボソボソ話をしていましたが、最後に、丁寧に何度も挨拶をして出て行きました。一方、女の子は奥の方で食事をしていたようです。私が朝食を済ませ、出発の準備をして上階の客室から下りてきて宿代を払うと、レジの女性は「この子は今日が初日なんですよ」と紹介しました。私は、お愛想で「彼女なら何でもこなせますよ」と言いましたが、その間女の子は、我々から少し離れた所で、両手を前に組んで佇みながら、ずっとニコニコしていました。

久し振りに見る、ドイツ人が愛らしくほほえむ光景です。

私は、「おそらくこの子は、学校の成績も大したことなかったんだろう。しかし、こんなにいい子なら、きっとこの子なりに生きる道を見つけようし、いつかいい主人にも恵まれるだろう」と、半ば祈りながら宿を出ました。

随分凡俗な人情話になってしまいました。が、私は、この歳になりまして益々このような人間模様に共感を覚えるようになっておりますし、研究を離れた局面では、相変わらず、人生を如何に生きるかという問題と虚構の文学世界とを本能的に結びつけてしまう、端的に言えば、文学作品の中について人間臭を求めてしまう衝動に支配されているようです。

ご清聴、有難うございました。

追記：本稿は、平成26年（2014年）11月8日、関西大学独逸文学会研究発表会で行なった講演の原稿を加筆修正したものである。